

## アジア社会科学研究協議会（AASSREC） 第11回大会に参加して

神戸大学 北原 淳

AASSREC（アースレック）という名前は、1993年に第10回大会が川崎市であったので、聞いてはいたが、今回1995年10月中旬、ニューデリーでの11回大会に出席して、初めてその概要を知った。20年以上の歴史をもち、16カ国（社会科学関係の国立機関（学術会議、社会科学協議会、アカデミーなど））をメンバーとし、ユネスコが支援をするアジア地域の国際的学術交流の組織である。2年毎に行われる大会では、各国の社会科学の学会活動、学術行政の成果報告、テーマ・シンポジウムなどが行われる。

第11回ニューデリー大会のテーマは、「グローバライゼーションの国内的インパクト：社会開発問題を中心に」であった。このテーマは、中国がいち早く始め、インドもやや遅れて91年に踏み切った、投資と貿易の自由化政策（経済自由化）によって、アジア各の国内の社会開発にどういうインパクトがあるのか、という問題関心である。乱暴にいえば、「外国資本を歓迎し、計画経済放棄や規制緩和を選択したことによって、教育、福祉など国内の社会政策、社会開発がどの程度切り捨てられたか」、という関心であろう。NIES、中国、東南アジア、南アジアはもちろんだが、イギリスから離れアジア圏への編入をめざすオーストラリアも似たような状況にあるらしいから、これらの国々の共通の問題関心である。

第1に感じたのは、日本の場合、この共通テーマへの取り組みが難しいことである。そもそも共通テーマを十分に知らずに出かけたという準備不足もあるが、準備しても、一体、このテーマに日本としてどう対処できるのだろうか。テーマの実体に忠実なら、たとえば、工業生産のアジア・シフトによって産業空洞化を迎えた地域社会、農村で、下請部門、農村工業従事者にどのようなしわよせが来ているのか、というようなテーマとなろう。しかし、もっと抽象的、観念的に、自国の近代化と国際化がたどった道を反省し、再検討するという方向もあるだろう。シンポジウムの内容からみると、上記の問題関心に実体的に迫れる多くの途上国・中進国は、開放経済下での社会開発上の成果、問題点を中心とする報告を選び、先進国的な日本、ロシアは後者の報告を選んだ結果となった。

第2に感じたのは、科学研究の中立性に対する認識、社会科学に期待される役割が途上国・中進国と先進国とではかなりギャップがあることである。「主体思想」にもとづく社会科学を説いた北朝鮮代表の報告は前者の典型だった。この点では、同じく前者に属する中国などと比べて、オーストラリア、インド、韓国などは「先進国型」に属すると感じた。ただし、ニュージーランド代表は、社会改良運動のための「アクション・リサーチ」という実践的な研究態度を披瀝し、客観的な「科学的研究」を批判した。

私の報告は、「先進国」の観念派として、「村落開発における共同体のリアリティーとアイディアリティー」と題して、日本の共同体論の変化（50年代の「近代主義」から70年代の「農本主義」への転換）をふまえながら、タイのNGO村落開発運動で主張されている自立論的共同体論を批判し、工業化アジアの共同体論は、「市民社会における部分

システムとしての共同体」という言説構造と計画理論を備えるべきだ、と主張した（詳しくは、拙著『共同体の思想：村落開発理論の比較社会学』世界思想社 1996年3月）。これに対して、同じ「先進国」の観念派として、唯一ロシア代表が理解を示してくれたが、同氏はロシアの近代化を、従来の暴力を含む普遍主義の追及一本槍から、土着主義をふまえた普遍主義というポスト・モダーンな変化に転ずるべきだと、アメリカ的議論の枠組みをふまえて、抽象的に主張した。私は、オールド・ナロードニキとチャヤーノフ的ニュー・ナロードニキを抹殺したスターリンの共産集団農場による暴力的農村近代化への批判という射程をもった内容だと受け取った。

現実的な关心にたつ報告としては、1977年に、社会主义的福祉国家の経済的破綻から、南アジアではトップを切って開放経済に踏み切ったスリランカ代表の内容が印象的だった。開放化による全面的福祉国家体制の崩壊、それに代わる部分的「社会開発」への着手、結果としての所得格差の拡大、青年層の失業を遠因とする民族対立とテロの激化など、開放経済のマイナス面を強調する悲観派の典型だった。オーストラリアにも似た状況があるらしい。これに対して中国代表の報告は、開放経済と教育の成果がいかにすばらしかったかを誇る、楽観派の典型だった。インド代表はいわば折衷派で、開放化への態度は鮮明でなかった。挫折した福祉国家制の経験をふまえて、自由な「成長」と、それが犠牲にする「福祉」との間の矛盾を鋭く意識する旧英國植民地下の国々の知識人。それと比べて、東アジアの伝統的・文化に依拠する成長を自負する中國の知識人には、両者の矛盾という認識が欠如しているのが印象的だった。

アジアの近代は、鼻息はともかく、その社会科学的な認識や水準においては、そう簡単に欧米の近代を超えないし、超えたような錯覚をおこしてはならない、というのが印象的結論であった。インドを初体験して、「アジアの議論」にじかに触れ、そういう「目覚めへの旅」をしたという点では、えがたい機会だった。